

高齢者の救急対応

第11回 事例集(1)



講師

まえだ ひろゆき

名前 前田 博之

maeda.jpg

所属 富良野広域連合 富良野消防署南富良野支署

出身 富良野市

消防士 挙命 平成21年4月1日

趣味 映画鑑賞 ラグビー

◇はじめに◇

今回、高齢者救急事例集として担当させていただくこととなりました、北海道富良野広域連合富良野消防署南富良野支署に勤務しています、前田博之と申します。

私が勤務している南富良野町は人口2,800人程の小さな街で、高齢者が人口の3割を占めて

います。また年間の救急件数にあっては 100 件前後と少ないですが、その半数以上が高齢者による救急です。今回はその中から 6 症例をピックアップし、症例別に述べさせていただきます。

◇脳梗塞◇

事例 1 66 歳 男性

通報内容：祖父が畠で歩けなくなってきたので家まで連れてきました。意識もあり、なんとか喋ることもできます。手足もなんとか動かせます。(家族からの通報)

要請時の状況：5 時 50 分頃から農作業に出かけたが、家族が見ていると右足を引きずるような歩き方で、横方向に進むので異常を感じて家まで運び、救急要請する。

現着時の状況：傷病者は軽ワゴン車の 2 列目の座席で仰臥位にて救急車を待っていた(写真 1)。意識レベルは正常。主訴は、手が冷たい・頭がボーッとする。

車内の状況：車内収容後バイタル測定し、RR-18 回、PR-87 回、BP-146/64、SpO₂-96% 鼻カーネルで酸素 2 L 投与。投与後 99%。さらに観察を実施したところ、上肢、手及び下肢は自由に動かせるが、足指に麻痺が見られた。脳の病変を疑った。

診断：脳梗塞

脳梗塞は、高血圧症の既往がある人に起りやすく、主な症状としては片麻痺、意識障害の程度としては軽いのが特徴です。今回の傷病者に関しては、既往に高血圧があり、足指に麻痺、意識レベルとしても頭がボーッとする程度であったため、典型的な発症事例だったと感じます。本来脳の病変を疑った場合、地域の医療事情からドクターヘリの要請になるのですが、今回は時間が早朝だったため要請できず陸路での搬送になりました。

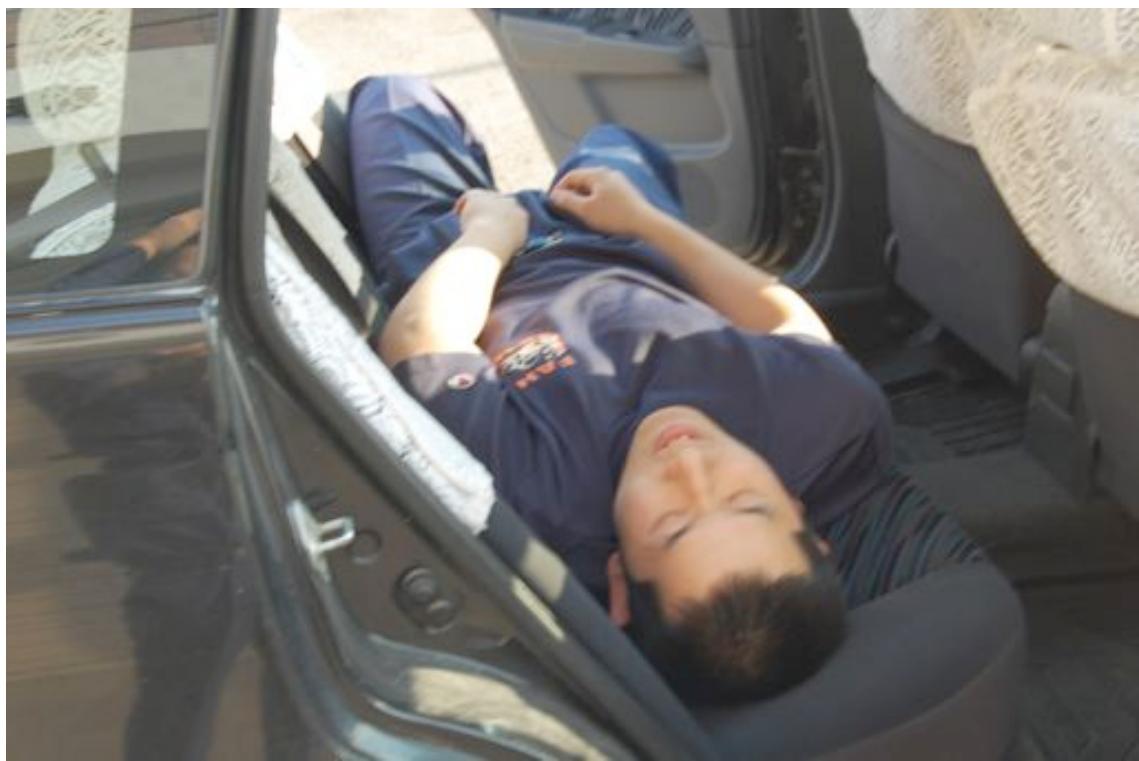


写真1 現場到着時の状況

◇熱中症◇

事例2 84歳 男性

通報内容：道におじいちゃんが倒れています。救急車お願いします。(通行人からの通報)

要請時の状況：偶然散歩していた町外の消防職員が発見し救急要請する。

現着時の状況：傷病者は道路脇草むらで道路側に頭を向け仰臥位。横に自転車が倒れていた(写真2)。意識レベルJCS10、外傷なし。現場で観察後、救急車内に収容する。

車内の状況：車内収容後バイタル測定し、RR-30回、PR-56回、BP-142/63、SpO₂-91%
高濃度酸素マスクで酸素6L投与し、投与後98%、BT-38.7°C。顔貌にあっては紅潮。外気温、傷病者の体温から熱中症を疑ったため、腋窩を冷やす処置を行う(写真3)。

診断：熱中症

熱中症には体温上昇を伴わない「日射病」「熱痙攣」と著明な体温上昇を伴う「熱疲労」「熱射病」があります。その中でも熱射病はもっとも重症で、体温も40°C以上に上がり、多臓器障害を伴い集中治療を要します。どの症状に関しても応急処置としてはいかに体温を下げるかということが重要となり、直射日光や高温多湿になる場所であれば、冷所や風通しのいい場所

へ移し、今回のように腋窩や頸部に氷嚢を当て体温を下げる必要があります。

今回の現場は国道(峠)で、自動車の交通量が多いのですが、通行人はほとんどいないような場所であり、傷病者が倒れていた場所は通行車両から見えるような場所ではなかったため、このタイミングで発見されたことが幸運だった症例でした。



写真2 現場到着時の状況



写真3 腋窩を冷やす処置

◇心室頻拍◇

事例3 77歳 女性

通報内容：Aさんの奥さんが胸を苦しがっている。救急車お願いします。(隣人からの通報)

要請時の状況：昨日の22時頃から胸が苦しく、今朝になり胸の苦しさが増してきたため救急要請する。

現着時の状況：傷病者は自宅居間で仰臥位。意識清明で、会話も可能であった。胸の痛みを強く訴えていた。現場にて高濃度マスク酸素 10L投与し、スクープストレッチャーにより車内収容。

車内の状況：車内収容後バイタル測定し、RR-36回、PR-113回、BP-144/80、SpO₂-79%であった。容態は変わらず苦悶状態で胸の痛みを訴える。心電図を確認したところV T様波形があり、CPA移行を予想し除細動器を装着する。病院収容後まもなくCPAに移行し、院内において協力し蘇生処置を実施した。

診断：心室頻拍

心停止における除細動の適応は心室細動(VF)と無脈性心室頻拍(pulseless VT)の2つの波形があります。心室頻拍には今回の症例のように波形は表示されても、脈も意識も清明な場合があります。そのような場合でも無脈性心室頻拍・心室細動に移行する可能性はあるため、搬送中も注意して観察を続けなければなりません。

◇出血◇

事例4 78歳 女性

通報内容：小学校の前でおばあちゃんが倒れている。頭から出血している。意識はあるようだ。

(通行人からの通報)

要請時の状況：不明

現着時の状況：傷病者は歩道にて左側臥位の状態で倒れており、頭部付近のアスファルトに血液が付着していた。意識清明であり、麻痺もなかった。右側頭部に3cmほどの損傷が見られたが、出血は止まっていた。念のため出血箇所をガーゼにて止血及び三角巾で被覆し、車内に収容した。

車内の状況：車内収容後バイタル測定し、RR-20回、PR-109回、BP-144/94、SpO₂-95%であった。出血箇所に注意し医療機関へと搬送する。

診断名：頭部切創

止血にはいくつかの方法があり、それぞれの方法の利点と欠点を理解しておく必要があります。

直接圧迫止血法…出血部位を直接押さえて止血する方法であり、外出血のほとんどに可能な止血法の第1選択です。とくに頭部・顔面・頸部・腰背部・四肢などの部位で効果が大きいのが特徴です(写真4)。

止血帯法…上腕、前腕、大腿、下腿の動脈損傷による出血が、上記の二つの止血方法で止血できない場合に限って使用する方法です。効果的な止血が行える一方で、末梢循環を完全に途絶えてしまうため、止血帯を巻いた部分より末梢の組織が時間の経過とともに壊死に陥ります。そのため30分を目安に緊縛を緩めて血流の再開を図る必要があります(写真5)。



写真4 頭部への直接圧迫止血法



写真5 止血帯を使用した止血帯法

◇ 腎盂腎炎◇

事例5 84歳 女性

通報内容：母が 40°C以上の熱があり、寒くて震えています。救急車お願いします。(家族からの通報)

要請時の状況：不明

現着時の状況：傷病者は居室において仰臥位の状態であった。意識はあったがいまひとつはっきりしない状況。また触診した際、体温が非常に高く、何かが詰まっているような呼吸音も聴取したため、口腔内及び鼻腔内を確認するが嘔吐物・痰は見られなかった。

車内の状況：車内収容後、バイタル測定を実施。意識レベル JCS3、RR-24回、PR-144回、BP-150/87、SpO2-81%であった。SpO2 が低下していたため高濃度マスクで酸素 10L 投与開始。投与後、SpO2-91%まで回復。傷病者の体温が高いことから車内温度にも注意し、継続観察しながら病院搬送となった。

診断名：腎盂腎炎

尿路感染症は高齢者や若い女性に多く見られる泌尿器系疾患の 1 つで、細菌が尿路を上行性に侵入し感染することによって発症します。症状としては尿路感染症の部位によって主症状が異なりますが、発熱・腰背部痛・頻尿・排尿痛・血尿などがあります。しかし、膀胱炎では症状が少ない為に風邪などとして見逃されることもあります。腹痛や背部痛を訴える傷病者では本人の楽な姿勢にして搬送します。

◇外傷◇

事例 67歳 女性

通報内容：乗用車の単独事故です。女性が 1 名足に怪我しています。(通行車両からの通報)

事故時の状況：60 km/h で走行していたところ、縁石に衝突。運転手は無事だったが、助手席に乗っていた女性が左足の痛みを訴えたため、様子を見ていた通行車両の運転手に頼んで救急要請したもの。

現着時の状況：傷病者は助手席に座位、左下腿の痛みを訴えていた。シートベルトは装着し、エアバッグも開いていた。

聴取により頭部・体幹は打っていないとのこと、また SpO2 も正常値だった。観察実施しネックカラーを装着した後、助手席シートを倒し後部座席よりバッグボードを挿入。頸椎を保護しながら動搖を与えないよう搬出した(写真 6)。

車内の状況：車内収容後バイタル測定し、RR-16回、PR-80回、BP-113/61、SpO2-99% であった。継続観察したところ、右胸部痛を訴えたが、外傷等なく、搬送中に痛みがやわらいでいった。

診断名：左脛骨腓骨骨折

年齢を重ねるにつれ骨量は減少し、わずかな外力でも容易に骨折を引き起こします。軽い

転倒や尻もちをつくような事故でさえも様々な箇所の骨折を引き起こす可能性があります。特に加齢に伴う変化では脊椎管が狭小化していることが多く、軽微な外傷でも頸椎損傷を起こす可能性があるため、頸椎の保護はとても重要になってきます。また、高齢者の方は疼痛の訴えが少ない場合があり、観察する際は痛みを訴える部位はもちろんのこと、その他の部位も丁寧に触診等を行い損傷を見逃さないよう注意する必要があります。



写真6 車外へ搬出時の状況

◇おわりに◇

高齢者の救急症例について6症例ほど掲載させていただきました。全国的に高齢化が進んでいく中、ますます高齢者の救急件数も増えていくでしょう。私自身、今はまだ経験も知識も少ないですが、これから先様々な症例を経験し訓練を重ね、救急隊員として地域住民のために努力していきたいと思います。